木の葉

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

木の葉

【Ｎコード】

Ｎ５０５１Ｉ

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

秋の公演で御爺さんと子供達が落ち葉を見て。ほのぼのとした童話です。

第一章

木の葉

お爺さんが一人で公園のベンチに座っています。周りは落ち葉で一杯です。
「お爺さんお爺さん」
「落ち葉がとても奇麗だよね」
そのお爺さんに小さな子供達が声をかけてきました。男の子もいれば女の子もいます。何人もの子供達がやって来ました。
「赤い葉っぱもあれば黄色い葉っぱもあって」
「とても奇麗だよね」
「そうだね」
お爺さんは子供達のその言葉に頷きました。
「とてもね。本当にね」
「それでね。お爺さん」
「私達思うんだけれど」
子供達はそのお爺さんにまた声をかけてきたのでした。にこやかに朗らかに笑って。
「この木の葉集めない？」
「集めて一つにしない？」
「それはまたどうしてだい？」
お爺さんは自分の周りでこう言う子供達に対して尋ねました。
「どうして一つにしたいんだい？」
「だって奇麗だから」
「奇麗なものは一つにしておきたいから」
子供達はこう答えました。
「だからなんだ。いいかな」
「お掃除してね」
「そうだね。それはいいことだね」

お爺さんは子供達のその言葉に微笑んで頷きました。
「それじゃあまずはお掃除してね」
「うん、木の葉集めよう」
「皆でね」
「よし」
お爺さんは少し力を込めてベンチから立ちました。もう子供達のうちの何人かが箒や熊手を持って来ています。皆でそうした道具を使ってお掃除をはじめます。
子供達はとても元気よく動いて木の葉を集めていきます。赤い葉っぱや黄色の葉っぱがどんどん集まってとても奇麗です。
「ねえお爺さん」
「やっぱり奇麗よね」
子供達はお掃除をしながらお爺さんに声をかけてきます。勿論お爺さんも子供達と一緒にお掃除をしています。皆で楽しくしています。
「木の葉って」
「集めるともっと」
「そうだね。けれどこうして集めるともっといいことがあるよ」
「えっ？」
「もっとって？」
子供達はお爺さんの今の言葉を聞いてきょとんとした顔になりました。
「もっといいことがあるの？」
「集めると」
「うん。少し寒くなってきたよね」
お爺さんは穏やかな笑みを浮かべて彼等に尋ねるのでした。
「だからね。木の葉を集めたらね」
「はい」
「それでどうするんですか？」
「焚き火をしよう」

こう子供達に言うのでした。
「木の葉を全部集めたらね」
「焚き火？」
「焚き火をするのね」
子供達は焚き火と聞いて楽しそうな声を出しました。皆少し寒くなってきていたのでお爺さんの今の言葉がとても嬉しかったのです。

第二章

「それじゃあ僕頑張るよ」
「私も」
「うん、皆で頑張ろう」
お爺さんはまた子供達に言いました。
「皆でね」
「はい」
「わかりました」
こうして皆頑張って木の葉を集めました。ベンチの前に木の葉を一杯に集めました。そしてお爺さんと子供達はその木の葉の山を囲んでいました。その前に子供達は出してきていた箒や熊手をなおしました。お爺さんは暫く一人でいましたが今はここにいます。
お爺さんが懐からマッチを取り出してそうして火を点けると。すぐに木の葉は燃えはじめました。ぱちぱちと音を立てて細い煙を立てながら燃えだします。
「燃えてますね」
「何か少しずつ暖かくなってきてますね」
「そうだろう？働いた後はね」
お爺さんは木の葉が燃えるのを見ながらにこやかに笑って子供達に告げます。
「こうしてあったまるといいんだよ」
「焚き火でこうして」
「あったまるんですね」
「そうだよ。そしてね」
そのうえで今度は棒を出してきてそのうえで。木の葉の山の中にそれを突き刺してそこから何かを出してきました。それが何かといいますと。
「あっ、お芋？」

「お芋ですか」
「そうだよ。お芋だよ」
お爺さんはまた子供達に答えました。
「焼芋だよ。さっき買って入れておいたんだよ」
「そうだったんですか」
「わたし達が箒とかをなおしている間に」
「うん、そうだったんだ」
子供達にその焼芋を見せながら教えてあげます。
「これはね」
「じゃあお爺さん」
「そのお芋おじいさんが食べるの？」
「僕も食べるけれど僕だけじゃないよ」
お爺さんは女の子の一人の質問に答えました。
「これはね」
「ええ。これは？」
「どうするの？」
「皆で食べるんだよ」
こう話すのでした。
「皆でね」
「じゃあぼく達も？」
「食べていいんですか？」
「そうだよ。皆でお掃除したからね」
だからだというのです。
「皆で食べよう。ちゃんと皆の分も買ったからね」
「はい」
「それじゃあ」
「焼けてからね」
言いながらそのお芋を焚き火の中に戻しました。
「皆で食べようね」
「わかりました」

子供達はお爺さんの言葉に笑顔で頷きました。そのうえで楽しい笑顔で木の葉を集めた焚き火を囲むのでした。秋のある日の静かな一日のことでした。

木の葉　　完

２００９・８・２０

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5051i/

木の葉

2010年10月13日15時04分発行